

## 生涯学習を通じたまちづくり・地域づくり

事例 1 実施主体：NPO 等 地域課題を共有した取組

### 水辺の再生を通じたまちづくりについて

浜松市安間川流域水辺再生まちづくり委員会（静岡県）  
（浜松 NPO ネットワークセンター、静岡大学工学部・  
教育学部、自治会有志）

一般的に危険で汚れた川というイメージを持つ安間川の自然生態の学びを通じて、子どもを含めた地域ぐるみでの自然再生への取組みが進んだ。

本取組みを通じて、ゴミ清掃、草取りなど自発的に川辺を管理する団体が活躍するなど、住民自らが安間川を地域の財産として守り育む機運が生まれた。

#### 安間川ゼミナール

小学校 5 年生を対象に、安間川を核とした「地域の環境」をテーマに据えた総合学習と連携して実施。年間を通じたフィールドワークを通じて、川の歴史・洪水の実態・工事の意義など安間川の現状や課題等を学んだ。

かつての地域と川との密接な関係や先人の努力を知ることやフィールドワークの体験の積み重ねを通じて、子どもたちは登下校で目にしていた「汚い川・遊んではいけない川」というイメージを払拭し、川への強い愛着や、郷土のために自分たちにできることは何かという観点を育んだ。

#### 水辺の体験プログラム

小学生を対象に、樹木・魚・虫の専門家を講師に招いて、鎮守の森や水田など、川のみならず周辺の環境を巨視的に捉えて、現場での観察や体験をもとに生態系の成り立ちや動植物と生息環境の関係を学んだ。

体験による「気づき」が、専門家の助言によって、生き物の存在意義や相互関係、さらに周辺環境などの知的な理解を深めることになり、身近な自然が楽しみと学びの場になることを体験した。

#### コミュニティ・アート活動

堤防沿いにパネルを並べてギャラリーに見立てて、親水スペースの水際に小石で魚をデザインしたり、フラッグアートを製作したりした。

安間川を主たるテーマに環境学習に取り組む小学校 5 年生と連携して生み出した作品は、地域住民の心を和ませ、暮らしの中で水循環を支える機運をつくる上で大きく貢献した。企画から実施まで住民・行政・地元企業・アーティストなど多様な大人が関ったが、それは小学生への学習への刺激となった。作品に対する地域の反響が子どもの学習の励みになった一方で、子どもの活動により大人の意識が育った。

#### クリーン作戦

安間川流域自治会や、親水スペースでの活動を機に新たに組織された市民グループが、小・中学生のボランティアとともに協力しながら、堤防の草刈り・川の中のゴミ拾い・水草の刈り取りを実施した。大人は子どもの張り切る姿を、子どもは大人の黙々と作業する姿を見て互いに刺激を受けて、活動に取り組んだ。

## 事例2 実施主体：NPO等 廃校を拠点としたコミュニティ再生

### 廃校の活用を通じたコミュニティの再生について

#### 朝日町新しい学校設立支援委員会（山形県）

（生楽耕、白鳥会、あさげい、実験表現研究会、朝日町、朝日町学校跡地利用推進プロジェクト委員会、朝日町立図書館、NPO朝日町エコミュージアム協会、東北芸術工科大学、東北芸術工科大学元倉眞琴研究室、東北芸術工科大学東北文化研究センター、東北文化友の会、ドイツカッセル大学、スタジオ建築計画）

地域の「子どものために」と思う気持ちの象徴であり、地域コミュニティの核として機能してきた町内の4つの小学校が廃校になったことに伴い、小学校とともに失われてしまった地域の絆を再結束するため、地域住民の力でこれらの廃校を活用して地域の新しい中心施設としての『あたらしいがっこう』を立ち上げた。廃校の活用を通じて住民やボランティアスタッフが繰り返し顔を合わせるうちに、新たに廃校の活用を目指すグループが誕生するなど、地域住民等の自主的な取り組みにより、廃校が恒常的に活用される拠点として生まれ変わるようになった。

#### 納豆づくり体験農業

グループ『生楽耕』の呼びかけで、地元のおじいさんとおばあさんの指導の下、旧水本小学校の近くの畑に大豆と蕎麦を植えた。併せて、4校の巡回清掃を行った。

#### 『寄り道』展

東北芸術工科大学美術科の教員を中心としたグループ『実験表現研究会』が、住民の運営支援のもとに芸術展を開いた。開催期間中は、放課後の子どもたちで毎日校舎が賑わい、展覧会の運営を通して旧上郷小を活用する住民グループ『白鳥会』が誕生した。

#### 『夢みる音楽会』

水本小学校閉校後に山辺町と朝日町に分かれて通う生徒2人が、新しいクラスメートと旧水本小で交流し合唱する取組。あわせて、子ども達が蝋燭をステンドグラスのように飾り、グラウンドに「夢」の人文字を書くなど、地区のお年寄りからは再び子ども達に会えて涙が出るほどうれしかったとの声もあがった。

#### 『イプセン先生を囲む4校合同研修会』

これまで4校で繰り広げてきた『あたらしいがっこう』の活動を地域住民やスタッフが互いに報告しあい、東北芸術工科大学東北文化研究センターが招いた、ドイツで持続的な地域づくりを研究するカッセル大学のイプセン教授に、今後の活動に向けたアドバイスをもらった。研修会は、4校のスタッフが互いの活動を鳥瞰し、今後の4校の活動を紡ぐための交流の場となった。

#### 『灯計 — たった一つのしずくからなにかが始まるかもしれない夜のお話』

スウェーデンとドイツの三人の芸術家と地域住民、小学校の卒業生が協力し、蜜蝋燭作家の協力を得て『時』の世界を演出した。同時にグループ『あさげい』がワークショップを開催し、子どもからお年寄りまでが、和紙とセロファンと蜜蝋燭で灯計を作って、雪のなかの立木の夕暮れ時を体感した。

### 事例3 実施主体：社会教育施設 地域文化による世代間交流

#### 高齢者から子どもへの地域の文化芸術の伝承を通じたまちづくりについて

兵庫県小野市立好古館（兵庫県）

核家族化の進展から高齢者との交流の機会が減少している子どもたちが、高齢者から地域に伝わる祭りや郷土芸能などの伝統文化を学習した。

子どもたちと高齢者が直接触れ合うきっかけ作りは、高齢者にとっては自分の知識の意義を感じる機会となり、子どもたちにとっては地域の文化を受け継ぐとともに、地域の高齢者や先人への尊敬の念を抱く機会になった。

子どもと高齢者の交流になどによって地域を見つめなおすことは、自分の住む地域への愛着や親しみを生む機会となりうるものでもあり、地域全体の活性化にもつながるものであった。

#### 「わたしたちのまち・阿形」展の開催（兵庫県小野市立好古館）

阿形町内で実行委員会を組織し、館の関係者だけでなく、地域の小・中学生、保護者、教員、老人会、子ども会、市史編纂室<sup>へんさん</sup>、行政関係者など、地域住民全体が協力して企画展を開催した。

企画展のテーマは「町そのもの」とし、小野市立好古館や市史編纂室が古文書や絵地図などから町の歴史の研究を行い、子どもたちはグループで、町の由来や伝承、年中行事、公民館や小学校の変遷、町内のお堂や神社、ため池、石碑、屋号などについて、両親や祖父母、町の高齢者から聞き込み調査を行った。

展示会には、調査を行った子どもたちや聞き込みに協力した高齢者をはじめ、多くの地域住民が足を運び、入館者は2週間で約1,000人になった。

高齢者は、自分の知識が企画展に生かされ地域の財産となることで元気になり、子どもたちも、祖父母の世代から埋もれていた町の歴史を直接聞き、自分たちの地域の成り立ちを知る機会を得ることができた。また、この取組みによって、同じ地域に住んでいても、それまで直接接することがなかった者同士が顔見知りになり、地域の結束を図ることができた。